

家族に捧げるバラード  
読者の皆様に贈る詩

# 別れても好きな女

ひと

幸しげる

青山ライフ出版



# CONTENTS

読者の皆様に贈る詩

幸  
しげる

129

家族に捧げるバラード

熊谷  
繁幸

115

別れても好きな女<sup>ひと</sup>

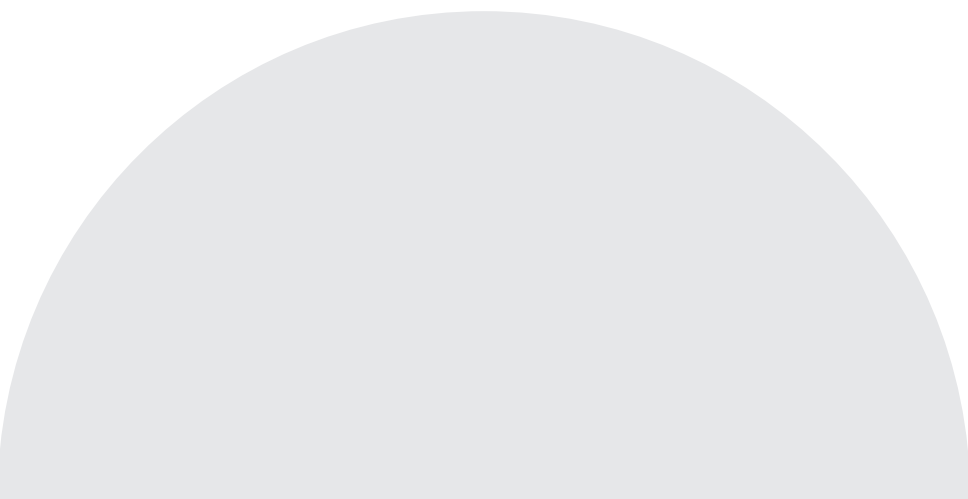
幸  
しげる

5



別れても好きな女<sup>ひと</sup>

幸  
しげる



# 別れても好きな女<sup>ひと</sup>◆目次

序章	.....	8	
第一章	千鶴との別れ	.....	9
第二章	初めての仕事	.....	12
第三章	三千子との出会い	.....	15
第四章	三千子との別れ	.....	24
第五章	寿代との出会い	.....	37
第六章	寿代との交際	.....	47
第七章	大島家との対面	.....	61

第八章	夢の中の現象	……	66
第九章	結婚	……	70
第十章	誕生と家族の絆	……	76
第十一章	突然の出会い	……	89
第十二章	転勤発令	……	96
第十三章	生命の奇跡	……	101

## 序章

ある日のこと、夢中で過去の色々な「出来事」が思い出され、何か変な雰囲気が目覚めました。そして自分流の詩をノートに書き綴った後のこと、心の気分が爽快になり全身が軽くなったように感じられました。

そこには現実と霊性が生じ、私の夢の中に現れたのだと思います。



## 第一章 千鶴との別れ

幸太は、夕張の高校を卒業し札幌の大学に入学しました。

札幌の中心街には大通りを中心に少し南に行くと平行に狸小路があり、人々の賑やかな繁華街でした。

狸小路の一本北通りに東映劇場があり、「モカ」というジャズ喫茶と「糸末」というラーメン店がありました。

幸太はよく「モカ」のジャズ喫茶に行き、曲の解らないジャズを友達と聴いていました。

また、狸小路の一本南通りには「サタン」という喫茶店があり、ここで初恋の女性の高木千鶴と週に二・三回逢っていました。

千鶴は、中学三年の時に夕張から札幌へ引っ越し、恋文を重ねて幸太が大学生になって札幌に来て再び逢うことになりました。

この時、日本は経済成長期で、戦後の東京オリンピックを開催した後は更に成長を進展させました。

千鶴は札幌の高校を卒業して、頭は良かったけれど大学へは行かず、歯科衛生士の専門学校に行きました。

「親の助けを借りて大学へは行きたくない。自分のやりたいことをやる、親なんてどうでもいいの、先生と名のつく人は嫌いよ」

千鶴の父親は、地方の市議会議員を終えて札幌に来ました。

彼女の話ししたが、幸太には理解できませんでした。

高校まで幸太は夕張に住み、祖父母、両親、妹の六人家族で暮らしていました。

父はサラリーマンをしながら、幸太と妹を大学まで入れてくれました。

祖父は、仙台で染物問屋として長男で生まれ、祖父の親が友人の保証人になり、友人の破産によって、祖父は親の家を出て夕張に来たのです。染物問屋はすでにたたみ処分し、弁護士が自宅に訪問して遺産相続の話をしました。

祖父は高齢で幸太の父が弁護士に対応し、結果は「相続に対して何も戴きません。放棄しますの」で全ては祖父の弟と、その妻へ渡してください」と伝えました。

幸太は、父の行動に感銘しました。この時、幸太は小学校低学年でした。

昭和四十年代前後の市議会議員は、ある程度の裕福な生活を送っていました。

時間が過ぎると共に、家庭環境の違いと、それに生きてきた人々の考えの違いが表面に現れてきました。

貧富の格差も問題になり始めてきました。

千鶴と恋文した五年間は、幸太にとって高校時代の価値ある大切な時間でした。

これによって学生時代の大きな成長につながりました。

やがて、千鶴は仕事が忙しくなり、幸太との交際も日々減っていき、いつの間にか離れてしまいました。

薄野の大繁華街でお酒を覚えたのもこの頃でした。

## 第二章 初めての仕事

大学を卒業して、初めての職業についたのが観光事業でした。

幸太は理工系でしたので「何故、観光事業についたの」と周囲から言われましたが、別に相手にはしませんでした。

入社前の希望と、入社後の現実は違っていたということです。

これは何処にでもあることで、この体験に出合った時、自分はこういう考えをして行動するかだと思えます。

幸太は、他の仕事に変えることもなく、初めて入社した仕事だから、自分なりにこの現実に立ち向かって行こうと思いつけました。

学生と社会人の違いは、幸太にとって大きな相違でした。

学生時代は与えられた学習をこなし、好きだの嫌いだの全て初体験の出合いを経験して忍耐力を養う期間でした。

社会人は責任を持って行動し、自分の成長を進化させていく期間。

そして、社会人を卒業した後は、人生の最終章を綴っていく期間と位置づけることにしました。

この他に一つだけ伝えたいことは、青年期までに体験して欲しいことがあります。

悪いこと以外であれば、どんな些細なことでも一番になってみるということです。運動会、マラソン、好きな科目、絵画、音楽楽器、書道等どんなことでもいいのです。

これを体験すると、満足感と優越感が同時に起こり喜びに変わり、自分の体感として世界が広がるはずで。

一番になることは努力が必要ですが、つかみ取ったときの気づきを知ってください。心がポジティブに変化するはずで。

六十歳の還暦を迎え、現在はまだ社会人期間ですが、この三つの期間に区分して一日一日を過ごしていくように考えました。

行動しなければ何も感じませんし結果が生まれません。

過去の一日を思い出しながら話を進めます。

社会人になった幸太は、観光事業の東京本社昭和観光(株)に入社し、北海道札幌市の札幌中央ホテルに配属が決まりました。

札幌市宮の森の山林に囲まれた、宮の森ジャンプ台の近くに社員寮がありましたので、そこに移り住みました。

男子寮と女子寮が屋根続きでありましたが、玄関は別々に設けられ区別されていました。ただ食堂は共同でしたので、男女が接する場はこの時だけでした。

ホテルの仕事は二十四時間なので、寮のバスが早朝から夜まで、社員の勤務に合わせて一日数回の運行を行っていました。

幸太の入社一年目は、三ヶ月の社員研修があり、支笏湖の別荘ホテルでフロント、レストランなど全ての仕事を覚えるため、同期の男性三人を含めて、調理人、施設員、事務員の七名体制で別荘の全十部屋を任せられていました。

三ヶ月の研修を終え、宮の森の寮に戻り、即戦力として、北の清々しい夏風をうけながら、札幌中央ホテルで勤務を始めました。

### 第三章 三千子との出会い

中央ホテルの周辺に大通りがあり、時計台と赤レンガの旧道庁が近くにありますが。

北には札幌駅がホテルの四丁目通り側から正面に見え、南には大通りと平行に狸小路があり、更に南に行くくと東京以北随一の薄野繁華街が、夜には煌々と街灯やネオンを輝かせています。

ここは、かつて千鶴と逢って飲食を共にした街、別れてから四年が過ぎ、高度成長期の影響で札幌の街も再開発が進められ、狸小路アーケード街もすっかり変わり、高層ビルが立ち並ぶようになりました。

喫茶店の「サタン」、ジャズ喫茶の「モカ」の店は影もなく消えていました。

中央ホテルに勤めて一年が過ぎ、幸太は二年目にして営業部へ配属になりました。

ホテルの営業といえば、婚礼、宴会、宿泊、レストラン全ての売上に貢献するホテルの顔でもあります。

一般企業、官庁、病院、学校等の顧客訪問し、自分を知って頂くという大切な部所です。

まずは自分の働いているホテル内の人々を知ること、そして協力をして共有していくことが必要